



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより8月号2013

正教聖歌の伝統2

ビザンティン～ロシア～日本



新シリーズ 10月から

前々回のシリーズ「知って祈ろう、奉神礼は面白い」(2011年2月～2012年4月)でビザンティンの聖歌発展の歴史については詳しくお話したので、次のシリーズではロシアの聖歌発展の歴史を中心にご紹介しようと思います。その中で正教会の聖歌の特徴、何が西方の宗教音楽と共通で何が違うか、逆に、西洋音楽の何が利用可能で、何が危険かも考えてゆきたいと思います。乞うご期待。

ISOCM 正教会礼拝音楽国際協会 学会

6月2日から6日まで東フィンランドのヨエンスーという街で開かれた正教会聖歌の学会に、静岡教会出身のクセニア・ネムツォヴァさんと出席してきました。ギリシア、ロシア、フィンランド、グルジア、ルーマニア、セルビア、スロヴァキア、ポルトガル、イタリア、アメリカなど各国の各分野の専門家が集まって発表を行いました。今回のテーマは「イコンと聖歌」。礼拝におけるイコンと聖歌の役割がさまざまな角度から解説され、また各教会の伝道の試みも紹介されました。私にとって興味深かったのは、8世紀のコンスタンティノーブルのストディオス修道院長フェオドルが聖歌を通して修道士たちの霊的成長を促した話、聖歌とイコンを通して子供たちと親たちに正教会の礼拝に親しむ日曜学校のプログラムの紹介、短く覚えやすい音楽の利用法、ルーマニアの会衆の歌う巡礼歌、60年代フィンランドにおけるイコンと聖歌のリバイバルについてなどでした。

参加者は大学教授や研究者もありますが、実際に教会で働く聖職者や聖歌者、聖歌作曲家、学生、正教会以外の合唱団のメンバー、ユニア(帰一教会)の聖歌指揮者、旧儀式派の聖歌者などいろいろです。

次回は2015年6月の第1週の予定です。誰でも参加できます。研究発表はすべて英語です。発表の他にも平日の晩課、日曜日の聖体礼儀があり、各国の代表が各国語で聖歌を歌います。私もクセニアと一緒に日本語で「聖なる神」と「天より主を讃め揚げよ」を歌いました。夜は聖歌のコンサートや、正教会らしく毎晩、飲み、歌い、語り合います。費用は航空券以外には滞在費も含めて4万円ほどです。次回は日本の聖歌についても発表する予定です。参加してみませんか。今回の学会の様子はビデオで見られます。

http://www.isocm.com/welcome_languages/index_nippon.html

今月の予定

聖歌練習

名古屋 聖体礼儀後、

半田8/21日(水12:00)25(日、代式後)主教祈禱の練習

名古屋指揮当番

4日マリア松島 18日ピーメン松島 25日エレナ廣石

今後の練習について

半田

10月20日(日)にダニイル府主教座下をお迎えして、「半田教会百年祭」を行ないます。そのための主教祈禱の練習を、毎月1回、水曜日12時からと、半田の代式祈禱後(第4週)に行います。主教祈禱ではイスボラなど新しい歌が加わるほかに、神品団との掛け合いがあるので、練習が必要です。主教さまをお迎えするのは、ニコライ大主教(明治24年)、セルギイ府主教(明治43年、大正4年、15年)、フェオドシイ府主教(昭和47年)に続いて6回目ですが、主教祈禱を半田で行うのは半田教会始まって以来、初めてのことです。ダニイル府主教座下も若いころ管轄しておられた半田に来られるのをとても楽しみにしているそうです。半田教会、心を一つに、声を一つに、がんばりましょう。

名古屋

新聖堂の建設と新しい教会での活動が一段落してきた今、これからの聖歌と教会活動を考えていく時期が来ていると思います。名古屋では誰でも参加できる「みんなで歌える」聖歌を実施してきましたが、「みんなで歌える」ためには、それを支えるだけのみんなの力が必要です。聖堂が大きくなり参拝者が増えた分、今まで以上の力が必要になってきました。教会はいつでも自由な奉仕が求められる所です。歌う者には美しい聖歌で祈りを支える奉仕も求められます。

9月から、一層の充実をはかるために、月に一度「聖歌の会」を催そうと思っています。正教会の礼拝観、聖歌の特徴、祈禱の順番などの講義と実習(合唱指導、八調、指揮の見方振り方など)の両面からの勉強会を考えています。誰でも参加できますが、特に次世代のパートリーダーに指名された方は時間を割いてご参加下さい。あわせて指揮者の養成も行います。詳しくは来月の会報でお知らせします。

ロシア語で祈祷文に音楽をつけることを「翻訳ペレヴォード」といいます。ただの音楽付けではなく、奉神礼で用いられる聖歌という言語に翻訳します。セルゲイ神父は長年「英語」の聖歌に携わってきた方です。そのエッセイから「翻訳」の妙技を学びます。

9. 時代、教会音楽の形とスタイル：ある特定のタイプの教会音楽だけを「霊的」と決めつけたら単純すぎます。自分の経験や好み、偏見、歪みが出るところです。正教会の聖歌には長い歴史があり豊富な財産があることを知らないから、単純に決めつけてしまうのです。たとえば、ある人たちはビザンティンやズナメニイ一辺倒で「西方の影響」を除外することが「これこそが原則に基づいている」と言いはります。(ビザンティン文化は西洋文明に影響を与えなかったでしょうか。)

わたし自身ポルトニヤンスキーからバフメテフの音楽の時代を批判しすぎてきたと思います。いつか、罪滅ぼしにポルトニヤンスキーとバフメテフ擁護の章を書こうと思います。実際、私たちはポルトニヤンスキーを「フィガロの結婚」のように解釈し、バフメテフを「バーバーショップ」のように歌い、「非奉神礼的だ」と非難したのです。

ズナメニイ一辺倒の人々もいます。「ズナメニイならずべてよい」。しかしいずれの時代の教会音楽にも、よい場合と悪い場合があるもので、最も純粋な「天使のチャント」に基づいたと称するズナメニイも、ことばのリズム(韻やリズム)への深い理解なしに歌われていることも多々あります。

追記：50年ほど前、アメリカやヨーロッパの正教会で、西洋風ではなくビザンティンや古ロシアの正教古来のスタイルを取り戻そうという運動が盛んで、西洋絵画や音楽の影響を受けたアイコンや音楽が批判された時代がありました。ここではその行き過ぎを反省しています。

日本の場合はむしろ、近代ロシアの合唱音楽が正教会聖歌の正統派だという誤解があります。これらの合唱聖歌はそもそも17世紀以後西洋音楽の模倣によって取り入れられたもので、それ以前のロシア聖歌やビザンティン聖歌など伝統的な聖歌が単旋律(単音)です。

参考資料 聖歌の工夫の例、正教会の伝統から考える 「やってみよう」 八調で歌おう3

ことばを重視して音楽付けする その2 トロパリ1調のメロディ

1. スラブ語(ロシア)11音節

2. 英語 6音節

3. 日本語 14音節

左の楽譜は聖体礼儀の第一アンティフォン「我が霊や主を讃め揚げよ」の冒頭で、トロパリ1調のメロディが用いられています。英語も日本語も1のスラブ語の歌がもとになっています。比べてみると、同じメロディが言語に合わせて変化されているのがわかります。

スラブ語は11音節、Благослови(讃め揚げよ)と Господа(主)に高い音、長い音が置かれて、強調されています。

英語は音節数が極端に少ないのが特徴で、高い音、長い音はLord(主)とsoul(たましい)が強調されています。O(おお)という簡単のことばはスラブ語や日本語にはありませんが、この音はあまり目立たないようにしています。

日本語の場合は音節数が多く、強弱アクセントがないので、各音節に均等に当てはめられています。

外国の聖歌を日本語にするときは日本語の祈祷文を生かすように音付けしなければなりません。一般の西洋音楽の場合は音楽が主体ですから、歌詞に合わせて音楽を変えることはありませんが、正教の場合はあくまでも「ことば」が主体です。発想の転換が必要です。ことばに合わせてパーツ(メロディの定型)を入れ替えたり、微調整をしたりします。

八調のパターンについての詳細はhttp://www.orthodox-jp.com/liturgy/obihod/obihod_index.htmlにあります。

ホームページのご案内

- 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

- 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

- 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料